

装備とは個性的なものであって各人の工夫によって如何よりも多様性をもつものである。

市販されているものは全て研究もされた上での製品ではあろうがそれのみに満足しては装備を生かして使う態度も育たず、個性的な山登りや沢登りを企画し楽しむこともできないでしまうことになりかねない。山登りとは先人の足跡を見つめつつも自分流の登り方で自分の道を切り拓いてこそ意義あるものと思う。個性的な装備を身につけている人こそ真の登山を知る人である。

## 2 スノーホウル考察

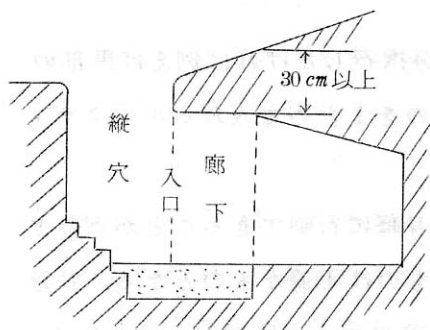
四方立夫

1970年春は、スノーホウル（雪洞）による縦走形式で、黒部横断を試みた。結果は計画があまかった上に、悪天候に見舞われ、前代未開の敗退となったが、今後の雪洞山行に於ける一つの展望だけは、持ち帰った。

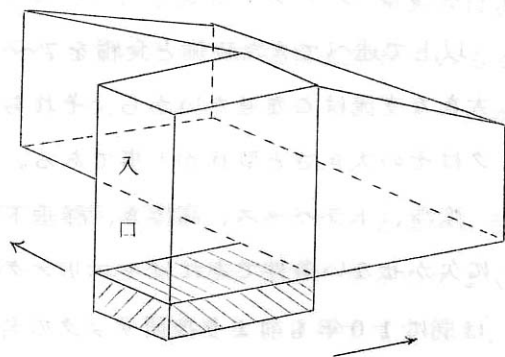
テント山行中に暇に明かして雪洞を掘り、仮泊するのとは違った多くの経験を体得して来たので、以下箇条書にその留意点をまとめてみた。

### I テントとの比較

A 図



B 図



矢印の方向に天井をさげる

1. 掘る場所はテント同様、第一に雪崩の危険性の無い、雪のしまった処。
2. 雪がしまり、且つ積雪が豊富であるという条件からして、やはり春山向きといえよう。
3. 軟雪の場合、億却がらすに必ず充分踏み固める必要がある。
4. 作製に際して、テント設営とは比較にならぬ労力と時間を必要とする。  
(所要時間は大体、一人が一人分の穴を掘るのに一時間半は見ておきたい。従って、6人パーティで3名だけで掘った場合は三時間程掛かると思わなければならない。)
5. 居住性は概してテントより勝れている。
  - a 人数・目的に応じた大きさに掘れる。
  - b 烈風は完全に防ぐ事が出来る。
  - c 室内の温度は  $-1^{\circ}\text{C}$  と一定であった。

しかし、大きな欠点がある。それは湿度が高い事である。従って一度濡らせば下山まで乾かぬと覚悟すべきで、それを防ぐには、普段のテント山行中、常にこまめに注意を払い、物を濡らさぬ習慣を付ける以外手は無いであろう。

以上の事を頭に置いて、実際に掘ってみよう。

## II 雪洞の作製

(横穴は従穴の応用なので、ここでは縦穴で説明するが、横穴の場合には特に、防風壁の位置及び大きさを慎重に考慮せねばならない。)

1. 入口が風向と直角になる様、直っすぐ縦穴を掘る。
2. 天井と雪面まで最低30cmはほしいので、背丈以上掘り下げる。
3. 幅は二人で掘れる程にすればスピーディーに掘れる。作製後、入口にブロックを積んで狭めれば保温の問題は無い。又A図の廊下部を長くする程保温性は増し、倉庫としても使える。
4. ここまで掘り進むとI-5-Cに書いた様に、湿度は上がり衣服がベトベトになるので、手袋だけでも穴掘用の軍手を持って行きたい。
5. 次にホールにかかる分だが、天井は入口を高く、奥を低くすると三つ

の利点がある。

a 掘り易い。

b コンロや吐臭の熱気が入口の方へ抜け、融雪や天井沈下を最小限に押えられる。


c もし雨が降っても天井の低い、すなわち奥の方へ流れる。従って、雨が降る時は天井を急傾斜にする程効果が上がると思われる。(我々は雨の経験がないので、実証されていないが。)

一般に天井はドーム型となっているが、bに対する配慮が欠けている為、換気は悪く、天井が落ち易い、ただ上からの圧力にはドーム型の方が強い。

6. B図のようにホールは、入口のどちらか片側に寄せる。

7. 作製に費やす時間は、大きなブロックを切り出せるか否に懸かっている。(ブロックは下から順次大きく、きれいに掘り出すと能率が良い。)

8. 一応掘れたら仕上げに掛る。まず天井はツルツルに仕上げる事。もしスコップ等の傷がついていると、融雪して水滴が落ちるのに必至。

9. A図の  部、すなわちB図の斜線部を掘り(深さ30~50cm)床を高くすれば居住性が倍増する。

10. 縦穴が深いので階段を作り、防風壁を構築する。(頭上を低気圧が通過する時は、風向が変わる事を考慮すべきである。)

11. 床にビニールシートを敷くが、シート自体滑るので、出発前から四隅に輪を作っておき、竹ペグで止める様にする。

12. スコップ・ノコギリ等を内に入れ、入口をシートカッターで塞ぎ、下に荷を置けば出来上り。

### III その他の事

1. 居住性は床の広さよりも、寧ろ天井の高さに左右されるので、最初縦穴を充分掘り下げたい。

2. スコップは自分の居る方に必ず置くこと。寝る時は内に、荷上げ等で出た時は外に出して置かないと、もし入口が塞がれば悲愴な思いで除雪

しなければならぬ。

3. ノコギリは雪に埋り易いので、その保管に特に注意する。

4. 我々は入口に荷を置いたので、奥に15cm角のブロック二つ分の穴をあけ、小キジ用トイレにした。本来なら入口附近にトイレを作るべきである。

以上思い当るまま書いて来たが、雪洞生活をしていると「山に入っている」といった感情は、テントで味わえないものがある。又、炊事用ブロックは壁を切り出せば済み、その穴は小物置やローソク台になる。そのローソクの灯は雪面に輝き、言葉に出来ない一種独特のムードをかもし出してくれる。

## 文 芸

### 1 探検部の " 牢名主 " について

古 谷 精 宏

小野竜弥一仲間は彼の事を技研の " 牢名主 " と呼ぶ、小生も又、そんな仲間の一人であった。大学四年間から社会人となって6年、足掛10年を通じて、小生も又この " 牢名主 " からいろんな事を教った様に思う。

十年誌発刊に際し、今一度この30何才かのこの 牢名主 の影響を考えてみたいと思ひペンを取ってみた。

そもそも小生とこの牢名主とは小生が新入部員として探検部に入部した時、すでにOBであり、彼は鹿児島にあった。そしてこの事に関してもその後、彼の性格のなせる業であったと聞く。

そして夏の立山～槍の合宿が終って冬山の準備のためのトレーニングとして六甲や蓬菜峡へ、岩登りやアイゼンの練習を毎週土曜日から日曜日にかけて行っていた頃であった。牢名主は、九州、鹿児島から帰阪した。そして我々に岩の登り方から、ザックのつめ方、登山用具の使い方を身をもって教えてまわった。

小生は元来、ヨウリヨウの良い人間で、夏山の合宿でもたえず疲れると、ザックの置きやすい所であつて休けいした様な人間で、テント場につくと